平野富二の生涯

本会理事　野田　和弘

平野富二は、本木昌造の後を継ぎ日本に活版印刷を広めたが、同時に日本の近代工業を先導した人物でもある。この稿では、主に富二の長崎時代の活動について述べてみたい。

富二は弘化３年（１８４６）長崎の地役人の矢次豊三郎の次男として、長崎の引地町（現・長崎市桜町）で生まれた。幼名富次郎。なお富二は２０歳の時、矢次家の旧姓である平野姓を名乗りさらに２６歳の時富二と改名した。

文久元年（１８６１）１５歳になった富二は、長崎製鉄所に雇われ機関方見習を命じられた。製鉄所には御用掛として、当時３７歳の本木昌造がいた。富二は昌造の下、蒸気機関や各種機械の基礎を学び、蒸気船の機関士として成長した。そして長崎製鉄所の蒸気船に、昌造が船長、富二が機関手として乗り組み、大阪、江戸方面に度々航海した。

その後富二は、幕府の軍艦回天に乗り組み、第２次長州戦争で長州との海戦に参戦したり、慶応３年（１８６７）には土佐藩に雇われ、土佐藩の蒸気船を運転したが、その間イカルス号事件に巻き込まれ、犯人と疑われ坂本龍馬らと共に取調べを受けている。

明治元年（１８６８）富二は、製鉄所機関方に正式登用された。この時の製鉄所の頭取は本木昌造であった。昌造は幕末から明治新政府に移る困難な時期に、製鉄所の責任者として経営に当ったが、明治２年（１８６９）病を理由に製鉄所を辞任した。昌造が退職した後、富二は製鉄所元締役助にまで昇任した。

同年明治政府はグラバーから小菅修船場を買収し、長崎製鉄所付属とし、２３歳の富二を責任者にした。富二は就任後１６ヶ月間に１万８千円の利益を上げた。

一方富二は、今後造船業を発展させるためには、小菅では限界があると考え、立神に新しいドックの建設を建議した。同年政府の許可がおり、富二はドック取建掛に任命され、ドック建設工事に着手した。富二は製鉄所の元締役助、小菅修船場所長、立神ドック建設工事責任者の三つの任務を持ち、非常な忙しさであった。

その後製鉄所は不正経理の問題で、頭取はじめ幹部が退職させられ、一時富二が実質上の最高責任者となったが、富二も明治４年（１８７１）製鉄所を自ら辞任した。

一方製鉄所を辞めた昌造は、明治３年（１８７０）に新町活版印刷所を設立し、活版事業を起こしていた。大阪、東京に販路を広げ事業は伸びていたが、経営状況は良くなかった。また昌造の体調も芳しくなかった。このような中、昌造は製鉄所を辞めたばかりの富二に、活版事業を引き継ぐように説得した。富二は造船事業に興味があったが、最後は昌造の頼みを聞き入れた。

富二は活版印刷所の経営を改革し成果を上げたが、今後の事業発展のためには、東京への進出が不可欠と考え、明治５年（１８７２）８名の社員と共に東京に移り長崎新塾活版印刷所を開設した。事業は順調に拡大し、翌年には築地に新工場を建設し東京築地活版製造所を開設した。その後この会社は、日本の活版印刷事業の中心となり、昭和１３年（１９３８）まで続いた。

明治１０年（１８７７）富二は、海軍省から石川島修船場（現・東京都中央区）の跡地を借用して、石川島平野造船所（株式会社ＩＨＩの前身）を設立し、日本で最初の民間造船会社を起こした。富二にとっては念願の造船事業への進出であった。

最初は船舶の修理や小型蒸気船の新建造を行い、同時に印刷機など機械製造も手がけたが、明治２１年（１８８８）には軍艦鳥海を建造するまでになった。その他吾妻橋の架設、日本初のエレベーター設置、海運会社、土木会社など、常に時代の先端を開く事業を展開した。

明治２５年（１８９２）１２月富二は、都内で演説中に脳溢血で倒れ死去した。享年４６歳。墓は東京都台東区の谷中霊園にある。

本稿は令和６年３月例会の発表要旨である。

参考文献

江越弘人『平野富二』長崎文献社　２０１９年

髙松昇『石川島造船所創業者　平野富二の生涯』上巻・下巻（株）ＩＨＩ　２００９年

古谷昌二『平野富二伝』朗文堂　２０１３年

「平野富二生誕の地」碑（二〇一八年建立）
長崎県勤労福祉会館前（長崎市桜町）